

# えがお通信 vol. 32

東日本大震災学童保育復興支援  
えがおプロジェクト

愛知学童保育連絡協議会  
名古屋市学童保育連絡協議会  
2021/7/12

## 『第1回えがお交流会』

6月16日(水)にオンラインで「第1回えがお交流会」が開催されました。

参加者は岡崎から指導員3人、保護者2人、豊橋から指導員1人、豊川から元指導員1人、事務局から5人の計12人でした。



以下、報告になります。

えがおプロジェクトの活動が始まり10年目に入りました。ここ数年は新型コロナウイルスの影響で交流のある震災地の方々と直接お会いする活動ができない中、今後の活動の方向性や、活動を振り返るため、今までに活動に参加したメンバーを中心に座談会を開催いたしました。

活動に参加したメンバーが、それぞれの思い出を語る中で、中心になったのは、「我々は被災地の応援イベントではなく、被災地の日常を取り戻すお手伝いをしに行く」という活動の原点であり、日々の生活が大変な最中でも我々を迎え入れてくれた被災地の方々、資金の援助など活動を応援して下さいました。

そして活動を通していく中で、被災地の方々とは、ともに学び、刺激を受けあえる交流の機会に

もできた事を振り返りました。

一方で、活動記録は残っているものの記録外の記憶は「忘れていないのだけれど、しっかり覚えていない」ということにも気が付くことができました。

何もないところから始まった「えがおプロジェクト」活動が、多くの方々に支えられる中でできた交流を次世代につなげていきたい。また、その活動記録や経験を次世代につなげていきたい。と確認をすることができた交流会でした。

## 『いわき市学童保育連絡協議会との話し合い』



2021年2月17日(木)20時~21時30分

愛知からの参加者4人、いわきからの参加者8人の合計12人でえがおプロジェクト10年の活動についてZoomで話し合いました。その内容を報告します。

## 【えがおプロジェクトの活動はどうだったのか】

これまでは、いわき市や福島県までの視点だったが、大きく外へ目が向くようになった。また研修や組織作りなど沢山の刺激を得られた。全国学童保育研究集会やあいち学童保育研究集会などこれまで縁の無かったものが身近な存在になった。

いわき市学童保育研究集会も第7回を迎えた。

## 【いわき市の現状】

高学年の入所希望者が増えて待機児童が生まれている。ある小学校では、新入生入所希望者が60人のところもある。

いわき市には現在72クラブの学童保育がある

が、保護者会運営だったところが法人化することによって、保育内容が保護者にうまく伝わらずに連携で悩んでいるところが増えている。市連協を退会するところも生まれている。

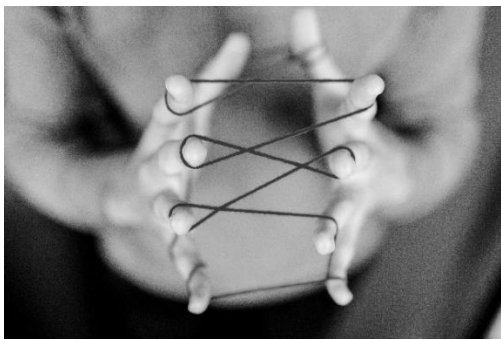
行政との連携がうまくいっているだけに、運動(連協)の加入数をもっと増やしたい。

### 【安全・連携をめぐる】

震災の時に、被災学童の児童を被災していない学童保育で受け入れた経験からいくつかの学童保育毎で、非常時保育連携のシステムを作った。また地域との連携関係も確認してきた。

いわきの私たちがえがおプロジェクトに入って、連携を深める方法もあるねの声もありました。

最後に来年度も2～3回交流会をやりましょうと確認しました。



### 『岩手・気仙連協とのリモート交流会』

なかなか互いに行き来できない中、11月21日、初めてとなる岩手・気仙連協とのえがおリモート交流会を行いました。

愛知からはえがお事務局メンバーと豊川の磯村さん、岩手からは気仙連協会長はじめ保護者役員、気仙の中でも中心的役割を果たしているさくらりっこなどの指導員3名、11名の参加でした。

### 【10年が過ぎて】

今は13か所が連協に加盟、被災した施設は全て新設、または学校内に移転できています。当時の指導員は半数ほど。ほとんど震災を知らない世代となった子ども達にいざという時のことを教えていく必要を感じています。地震が来たときの役割分担はされており、防災防犯マニュアルづくりを行い学校とも共有しています。

### 【当時のこと】

あの時、3日間保護者がお迎えに来られなかった子どももいた。指導員は不安や家族への思いを抱えて、子ども達全員が保護者の元へ帰るまで待機することを決めました。

さくらりっこ学童保育所は津波の被害を受けませんでしたでしたが、どうやって他の学童保育所を助けていくか苦労したそうです。被害を受けた学童保育所の受け皿となっていたのです。

必死で保育をしていた指導員のみなさん。無我夢中だった自分たちが、しんどいのだと気づいたのは3ヶ月経ってからでした。ある日突然、震災の映像が観られなくなり、みなが涙を流し続けたそうです。当時の気仙連協会長が話していた通り、指導員のメンタルケアができないと保育どころではない、厳しい現実でした。

### 【支援を受けて なぜ学び続けるか】

そんな中、愛知からの保育支援はありがたく、何より愛知でも同じ保育をやっているんだということがみえて心強かったし、その後研修交流などでも自分たちが井の中の蛙だと知る機会もできたのだと話してくれました。

研修への意欲は愛知も学ばなければと思うほどです。あいち研究集会や他の研修もこれまで何度も来てもらいました。今年度の指導員協会の研修も受講してくれることとなりました。

「私はお母さんの遺体を見られたからまだ良かったんだ」「お母さんの匂いがかぎたい」と言っていた、お母さんを亡くしたその子を前にして自分は何にもできなかった。だからこそ現場にいる人間は学ばないといけない。指導員は命を預かる仕事だから、知識も経験も必要、命を守る研修が必要なんだと、研修へ学びへと気持ちが向かいます。

震災当時の話、近隣学童保育所が助け合って乗り越えたこと、初めて聴く話にハッとしたり、愛知も学びたいと思うことも多々ありました。

これからも交流を続け、少しずつ輪を広げていきたいと思えた交流会でした。



Image by rawpixel.com